

朝鮮人強制連行と 「宗教教師勤労働員令」

飛田 雄一



今年の六月に神戸学生青年センター出版部より『朝鮮人強制連行とわたし』川崎昭和電工朝鮮人寄宿舎・舎監の記録』を出した。著者は、岡山市内在住の日本キリスト教団牧師・脇本寿さんである。脇本さんは、太平洋戦争中の一九四四年七月、東京の弓町本郷教会の伝道師として働いていた時、「宗教教師勤労働員令」により徴用されて昭和電工川崎工場の朝鮮人寄宿舎の舎監をしたという経験の持ち主である。その寄宿舎とは強制連行された朝鮮人のものである。

この本は両面に表紙があるという、少し変わった体裁をしている。右から開けば縦書きの日本語の本で、左から開けば横書きの朝鮮語の本である。写真等の資料は真ん中に入っている。一般的に日本語が縦書き、朝鮮語が横書きで出版されることを利用したのである。日本語圏の人にも朝鮮語圏の人にも読んでほしい内容の本は、こんな体裁の本

記』の第三巻「光復と興国」に李鍾祿さんは「受難と創造」(九二九〜九四三頁)を書いている。

鳥取での研修会で伺った脇本さんの話をまとめてお送りした上で、もう一度岡山にインタビューに行った。なにしろ五〇年前のことで脇本さんの記憶も定かではない。でもいろいろ質問したりしているとよりはつきりしてくるという面もあったようである。その年の一月には、いっしょに現場の昭和電工川崎工場を訪ねることにした。大雨の日だったが、川崎市の職員とふれあい館の職員が同行してくれた。工場を訪ねると、さすがに戦争中そこで働いていた人が、訪ねてきたというので門前払いをされることもなく、それなりの応対してくれた。でも会社側の回答は、「当時の書類は全く残っていない」ということだった。訪問の成果は上がらなかったが、その後、寄宿舎のあった場所等を確認することができた。

その後脇本さんは、自分自身で昭和電工の社史等を調査され、そのことを『朝鮮人強制連行とわたし』に書かれている。

六月四日には、脇本さんを招いて神戸学生青年センターで朝鮮史セミナーを開いた。「朝鮮人強制連行を問う」をテーマに、金英達さんの「強制連行とは何か」と脇本さんの「……舎監として」の二つの講演が中心のセミナーだ。セミナーの話は、それぞれに興味深いものだった。当日、脇本さんはB4で七、八枚の資料を持ってきて下さった。それは、日本キリスト教団宣教研究所の資料室にあったもののコピーだが、脇本さんを徴用した「宗教教師勤労働員令」関係のものだ。その中にあったのが下のもので、一九四四年五月一日付で文部省教育学局宗教科長から鈴木浩二宛の文章だ。この鈴木浩二は当時の日本キリスト教団の総務局長をしていた牧師で、実は私の祖父(母の父)なのである。祖父は、戦前、神戸教会の牧師をしていた。そして一九四一年、戦時体制下で時の権力に日本のキリスト教(プロテスタント)が統合されて日本キリスト教団(日本基督教団)が設立されたとき

を出すのがいいのではないかと考えたのである。定価は、四〇〇円、韓国でも販売する意気込みがあるんだということを示すために千五百ウォンという定価もつけた。これは交換レートを考えてものではなく、本の分厚さをみて適当につけた定価である。日本でウォンで売ってしまうと赤字になるので、あくまで円で発売中である。翻訳は、学生センター朝鮮語講師の金希 さんによる。

私は、脇本さんと九一年九月に始めてお会いした。そのとき私は、鳥取県の八頭教会で開かれた日本キリスト教団東中国教区の研修会に講師として呼ばれて在日朝鮮人問題等について話しをしたが、そのとき研修会に参加されていた脇本さんと話する機会があった。そこで一九四四年七月から翌四五年一〇月まで川崎の昭和電工で、強制連行された朝鮮人寄宿舎の舎監されていたことを伺った。強制連行の歴史を掘り起こす作業の必要性を常々考えていた私は、その話に興味をもったのである。当時、強制連行された朝鮮人寄宿舎の舎監をしていた日本人はかなりの数にのぼると思われるが、そのわりには当事者の証言が少ないように思う。「飯場が××にあった」、「××に社宅があった」という証言より、その朝鮮人ともにくらした舎監の証言の方が、よりリアルティがあり貴重な証言であることはまちがいない。

その研修会では、もうひとつ興味深い話を伺った。それは八頭教会の種谷牧師から伺った話で、一九四四年一月に同志社大学神学部(学生・文熙爽(平文一)と李鍾祿(岩本光正)が徴兵を拒否して八頭教会に逃れ、しばらくの間滞在したというのである。文熙爽さんは戦後、韓国の文部大臣になった方である。教会の記録では四、五日滞在したとあるが、種谷牧師の夫人の記憶では数カ月滞在したという。当時、彼らももっていた岩波文庫がいまでも残っているという。種谷夫人の兄と文さんが同級生だった関係で、八頭教会に逃げてきたとこのことだ。当時同じく同志社大学神学部(在学中であった青丘文庫の韓哲曠館長の話では、文さんは「島根に逃げて結局捕まった」と聞いているとのことだった。一九九〇年一月に韓国で刊行された『1・20学兵史

昭和十九年五月十日

文部省教育学局宗教科長

鈴木浩二殿

四月十九日付勸告第一〇四三號ヲ以テ通譯教シ置候宗派教團ノ牧師僧侶ノ勤労働員ニ關シテハ豫テ格別ノ御配慮ヲ煩ヘシ深謝仕リ候取テハ右實施ニ關シ最モ早夫々御手配中ノコト存ゼラレ候ガ貴縣或ハ貴國ニ於テ被勸告者ニ對スル練成會開催ノ際ハ豫メ其ノ日程及實施要領等ヲ本省ニ御通報ノ上實施相成様教度此段及御願候
尚被勸告者中工員ノ練成指導擔當者タルベキ者ニ對シテハ來ル六月全圖數ヶ所ニ於テ本省主催ノ下ニ練成會開催ノ豫定ニ付御舎々處相成度申渡候
敬具

務局長に就任したのである。戦後、再び神戸教会にもどり、私が小学校の二、三年生の頃引退して東京の娘(私の叔母)のところに行き、その後しばらくして亡くなったのである。

私は、日本キリスト教団の中核にいた祖父が、当然に「宗教教師勤労働員令」にもかかわっていたであろうと想像していたが、鈴木浩二の名前が鮮やかに見える「資料」を見て愕然としたのである。脇本さんを始め「……勤労働員令」によって徴用するときには、祖父の名前で文書が出されていたのである。

七月に入ってから、私は東京に行ったついでに日本キリスト教団の宣教研究所を訪ねた。そして脇本さんがセミナーの日に持ってきて下さった以外の資料も閲覧しそのうちいくつかをコピーしてきた。それから資料の紹介もかねて、「宗教教師勤労働員令」について考えてみようと思う。

「宗教教師勤労働員令」というのは、最初は仏教会に対してなされたようだ。一九四四年一月二四日付、厚生省勤労局長から各都府県長

